

ω 3 脂肪酸による高脂血症治療と食育

大和田 潔

秋葉原駅クリニック

東京医科歯科大学臨床准教授



高脂血症、糖尿病、高血圧、肥満など複数のリスクファクターを重層的に発症するメタボリックシンドロームは、心筋梗塞、脳梗塞などの重篤な合併症の大きなリスクファクターである。そのためメタボリックシンドロームのコントロールについては疾病予防の見地から大変に注目が高まっており、国家的戦略のターゲットともなっている。高脂血症のコントロール、特に高トリグリセライド血症は動脈硬化性病変の予防の点からも重要である。魚油に多く含まれる EPA (Eicosapentaenoic acid : エイコサペンタエン酸, C20:5 ω -3) や DHA (Docosahexaenoic acid : ドコサヘキサエン酸, C22:6 ω -3) などの ω -3 脂肪酸による高トリグリセライド血症への有効性が指摘されてきた。EPA はイコサペント酸エチルとして製剤化されており、著者は高脂血症治療における EPA の意義について患者データの蓄積と解析を行った。イコサペント酸エチルを用いた本邦での大規模試験「JELIS」では、高脂血症治療効果のみならず脳梗塞の再発予防効果も認められた。一方、EPA と同じ魚由来の ω -3 不飽和脂肪酸である DHA においても同様の高脂血症治療作用を有する事が予測されており、DHA の臨床現場での効果についての結果が待たれていた。今回、DHA が定量され含まれている食品を高脂血症の患者 20 名に用い、解析可能なデータが回収できた 16 名について各種血清脂質に対する結果を得、日本予防医学会雑誌 (pp27- 31, vol.2 No.1 2007) に報告した。今後の食育を含めた、高脂血症治療について考察を行いたいと思う。